

## 日本最古の造船所跡「軽野神社」と古代船「枯野」

信州大学名誉教授 伊藤 稔

10 年ほど前に信州大学工学部を定年退職し、長野市から静岡県沼津市に移り住んだ。ところが新しい生活をはじめて直ぐに、市南部の駿河湾の海岸線に沿って、静浦(しずうら)や江浦(えのうら)のような地名に混じって、日本語として読めそうになく意味の通じない地名が多いのが気になった。重須(おもす)、木負(きしょう)、久連(くづら)、古宇(こう)、久料(くりょう)など。そうこうするうちに、同じように奇妙で不思議な地名が、伊豆半島の西海岸から南海岸にかけて散在することを知った。宇久須(うぐす)、安良里(あらり)、子浦(こうら)、妻良(めら)、田牛(とうじ)など。

これらの地名が、札幌や釧路のように、北海道の地名の 8 割近くがアイヌ語に起源をもつことの類推から、太平洋南方の海洋民族ポリネシア人に由来するのではないかと思いつくには、それほど時間を要しなかった<sup>(1)</sup>。そのむかし、北赤道海流と日本海流(黒潮)に乗って南から漂流してきたポリネシア人たちが、日本列島から太平洋に突き出した伊豆半島に漂着し住み着いたのではないだろうか。この推測は、似たような奇妙な地名が、東海岸側にはほとんどみられないことから支持されるように思われる<sup>(2)</sup>。

しばらくして、江戸時代末に戸田村(現沼津市戸田)で建造された洋式帆船「ヘダ号」の再建運動に携わることになり、造船史や海事技術について勉強をはじめた。そのなかで、伊豆半島の中央に位置する伊豆市松ヶ瀬にある軽野(かるの)神社が、記録に残る日本で最も古い造船跡地だと知った(図 1)。「日本書紀」(巻第十)の応神天皇 5 年(西暦 274 年)の条に、「冬十月、科伊豆国、令造船。長十丈。船既成之、試浮于海、便軽泛疾行如馳。故名其船曰枯野。由船軽疾名枯野、是義違焉。

若謂軽野、後人訛歟。(冬十月に、伊豆国に命じて、船を造らせた。長さは十丈である。船ができあがって、試みに海に浮かべてみると、軽く浮いて速く進むこと、まるで滑るようであった。それで、その船を名付けて枯野(からの)という。(船が軽く速いことによって、枯野と名付けたというのは、理屈に合わない。おそらく軽野(かるの)といったのを、後人が訛ったものか。))」と記してある<sup>(3)</sup>。

さらに応神天皇 31 年(西暦 300 年)の条によれば、朽ち果てた官船(みやけのふね)枯野を薪として焼き、海水を蒸発乾固させて五百籠(かご)の塩を得た。そして、それを諸国に配布し、五百隻の船を献納させたという。しかしながら、それらの船が武庫水門(むこのみなど)に集合しているとき、新羅の使者の船からの失火による延焼で多くが焼失してしまう。そのため、天皇は新羅人を責めた。これを聞いた新羅王は大いに恐れ驚き、その償いに優秀な工匠(たくみ)を献じた。これが猪名部(いなべ)のはじまりであるという<sup>(4)</sup>。

なぜ山の中の神社が造船跡地なのかといふかしく思ったけれど、現地に行ってみてこの疑問は解けた。直ぐ近くを狩野川が流れており、その上



図 1 軽野神社

流には船材に適したケヤキやスギなどを豊富に産する天城山系が控えていた<sup>(5)</sup>。そして中伊豆地方には、上白岩(かみしらいわ)遺跡など縄文時代の遺構も点在した。であれば、西海岸に漂着したポリネシア人たちが、彼らの優れた造船技術と天城の良材を使って、船足の速い船を建造していたとしても不思議ではない。その噂が天皇のいる畿内にも伝わっていたのだろう<sup>(6)</sup>。

もしもポリネシア人たちが造っていた船を「カヌー」と呼んでいたのであれば、それが官船を「枯野(からの、かるの)」、建造した地域を「狩野(かのう)」、そこを流れる川を「狩野(かの)川」とした語源かもしれないとの推測が生まれる。ところが「カヌー (canoe)」を調べてみると、それはカリブ海の先住民族の言葉「カノア (canoa)」がヨーロッパに伝えられたものであり、南太平洋に住んでいたポリネシア人とは関係ないことがわかった——ポリネシア人たちもカヌーと同じような軽くて小さい舟を造っていた可能性は十分あるけれど——。したがって「枯野」も「狩野」も、「カヌー」とは語源的に関係ないと考えざるをえない。「かのう」には他にも、「加納」「嘉納」「叶野」「刈野」「鹿野」のような地名や人名もある。

むしろ、枯野の建造地だったことが、狩野の地名の由来であることを示す史料がある。江戸時代の 1800 年(寛政 12 年)に秋山富南(ふなん)によ



図 2 昭和の森会館に展示されている古代船「枯野」模型

って編纂された伊豆国の地誌である「豆州志稿」(巻之一)には、「枯野の船材出の所、故に名とす。この郷に式内軽野神社あり、カルノ、カレノ、カリノ皆転語なり。今狩野荘または狩野組という」と記されている<sup>(7)</sup>。そして周辺には、「上船原」や「下船原」といった、船との関係を想像させるような地名すらある。

この地を 11 世紀半ばから治めていた狩野氏の祖とされる茂光(もちみつ/しげみつ)は、伊豆大島に流されていた源為朝を征伐し、さらに韮山の源頼朝の旗揚げに出陣して、「石橋山の合戦」で自害している。その 10 代ほどあとの景信(かげのぶ)は、武人でもあり絵師でもあった。室町幕府 6 代将軍の足利義教(よしのり)が駿河の今川氏のもとに下向したとき、彼は呼び寄せられて将軍の前で富士の絵を描いた。将軍義教だけでなく同行した文人たちもその絵に感嘆し、京都によばれて御用絵師となる。これがもとで日本絵画史上最大の画派である狩野派が興ったことは、ほとんど知られていない。

東京商船大学(現東京海洋大学)の茂在(もぎい)寅男名誉教授は、「古事記」や「日本書紀」に記述されている奇妙な固有名詞の謎を、古代ポリネシア語に由来するものとして考察している<sup>(8)</sup>。そして、気宇壮大な「古代人大航海論」という仮説のもとに、古代日本人が太平洋を横断し、いつの間にか日本語の「枯野」が、今日世界に広く流布している「カヌー」の語源としてアメリカ大陸さらにはカリブ海に伝わったとの説を提唱している。今回、わたしが伊豆半島西海岸の不思議な地名をポリネシア語由来としたことも含め、古代語に詳しい専門家の方々からのご批判を楽しみにしたい。

伊豆市湯ヶ島の国道 414 号沿いにある昭和の森会館に、和船研究者で船大工の近藤友一郎製作になる枯野の模型が展示されている。それを図 2 に示す。この模型は、5~6 世紀頃の船形埴輪を基に推定した準構造船のようで、中国大陸からの影響

が強いように思われる。ここで論じたように、枯野がポリネシア人によって建造されたとすると、それは船首と船尾が尖ったカヌーに似た舟艇だった可能性が高い。であれば、この展示模型を枯野の復元船とするには無理があるような気がしないでもない。

漂着したポリネシア人が伊豆半島に住み着いたとの推論（もしくは仮説）が正しければ、それを知らずに編纂された「豆州志稿」の何ヶ所かは訂正を要するかもしれないとの想像すら膨らむ。軽野神社と枯野にまつわる興味はつきそうにない。

## 参考文献

- (1) ここでは、太平洋上の海洋民族の代表として、ポリネシア人を挙げているのであって、それ以外のミクロネシア人やメラネシア人であっても一向に構わない。
- (2) 伊豆半島の海岸線に沿った地名のうち、日本語として馴染まない奇妙な地名の由来を、アイヌ語によるとする説があるようである。ただその説では、ここで指摘した東西の地域的な偏りをうまく説明できない。
- (3) 小島憲之、直木考次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守（校注・訳）：「日本書記 ①」（新編日本古典文学全集 2、小学館、1994 年）。
- (4) 猪名部（もしくは「為奈部」）とは、木工技術をもって大和朝廷に仕えた渡来人たちによる職業部のひとつである。彼ら技術者集団は、造船だけでなく、宮殿建築にも大変優れていたといわれており、奈良の東大寺の大仏殿を建立したり、法隆寺や興福寺の建設にも関わったりしている。
- (5) 戸田村でヘダ号の建造に尽力した上田寅吉は、明治になって横須賀製鉄所（造船所）の初代主船大工長として、赤松則良（のりよし）の設計計画のもと、日本初の国産巡洋艦 4 隻の製図を引いている。このうちの一隻である木造汽帆走スループ艦は、天城山系の木材を使って建造されたことから「天城」と名付けられた。
- (6) 日本の記録で造船に関する最初の記述は、「日本書記」（小島憲之、直木考次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守〔校注・訳〕：前掲書）に出てくる。  
 卷第一の神代上（第八段）に、「一書曰、素戔鳴尊曰、韓郷之嶋是有金銀。若使吾兒所御之國、不有浮宝者未是佳也。……杉及櫟樟、此兩樹者可以爲浮宝。（一書に伝えていう。素戔鳴尊〔すさのおのみこと〕は、『韓郷〔からくに〕の島には金銀がある。もし我が子の治める日本に船がないとすれば、これは良くないことだ』……『杉と櫟樟〔くす〕、この二つの樹は船にするがよい』と仰せられた。）」とある。  
 さらに、卷第五の崇神天皇 17 年（西暦紀元前 81 年）の 7 月条に、「秋七月丙午朔、詔曰、船者天下之要用也。今海辺之民由無船、以甚苦步運。其令諸國俾造船船。（秋七月の丙午朔〔一日〕に、詔〔みことのり〕して、『船は天下にとって肝要なものである。今、海辺の民は、船がないために、甚だしく運搬の業に苦しんでいる。それゆえ諸國に命じて船舶〔ふね〕を造らしめよ』と仰せられた。）」とあり、そして同年 10 月条に、「冬十月、始造船船。（冬十月に、初めて船舶を建造した。）」とある。  
 校注者らによると、上記の崇神天皇の詔が出たのは、大量の塩を運ぶ必要性のためだろうとのこと。また、応神天皇 31 年（西暦 300 年）条に記されている、朽ちた官船「枯野」を焼いて海水から作った塩を下賜して造船させた逸話にあやかって、造船進水式に塩をそなえる民俗が生まれたとしている。
- (7) 地誌「豆州志稿」全 13 巻は、蕪山代官江川英毅（ひでたけ）の支援を受けて、現地調査とともに伊豆国内の村々から報告された地勢や伝承話などをもとに編纂されている。  
 平安時代中期の承平年間（931 年-938 年）に編纂された辞書「和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）」（略称「和妙抄〔わみょうしょう〕」）に、伊豆国田方郡 13 郷の一つとして「狩野」の記載がある。
- (8) 茂在寅男：「日本語大漂流—航海術が解明した古事記の謎—」（光文社カッパ・ブックス、1981 年）。